

「第3回 北九州市次期教育プラン検討会議」における主な意見

(敬称略)

1 アンケートについて

【上田】

アンケートの結果が興味深い。子どもたちが登下校時に危険を感じているということは、安全・安心の観点から軽視できない。対策は、大人の責任である。

子どもが5年前より劣っていると先生が感じている基礎学力や体力は、全ての問題の基本であり、これらがしっかりしていないと、プランに書いたことの実現が困難になる。

【宮口】

このアンケートには大きな意味があるので、今後も継続的に行ってほしい。

大人に相談しない・できない子どもが多いが、相談するにしても、意見や助言を覚えられないと、自分の中に取り込めない。まず、相談する経験、言語化する経験が必要。

【窪田】

貴重なアンケートになっている。先生に相談しない・したくないという子どもが4割以上いるという結果が衝撃的である一方、先生に大切にされていると感じている子どもが8割以上で、希望を持てる数字であるが、一般に自尊心が低い、メンタルヘルスが悪いと相談できないことがわかっており、背景が気になるところである。

【友納】

子どもが相談する勇気を持ち、どこかに相談できるようにすることが、メンタルヘルスの基本。一方で、相談を受ける大人側の問題もある。子どもは大人の感情に敏感なので、大人のメンタルヘルスも必要。

【鶴見】

地域の大人が子どもに関心を持っている、というメッセージが伝わると、登下校の安全・安心につながる。

授業が嫌いという子どもが多いが、子どもは褒められるから頑張ることができる。達成感の積み重ねが大切であり、その意味でSTEAM教育、教科横断的な学びが重要となる。

2 教育プラン案について

(1) 全体

【上田】

全体的に、よくまとめられている。重要なのは、市長が示した新ビジョンとの連動性。企業誘致とは人を受け入れることであり、定住してもらうために大切なのは教育。「一歩先の価値観」が出るとよい。

【宮口】

よく整理されていて分かりやすく、構成員の意見も反映されている。全体的にフラットなので、特徴的なコントラストがあると、なおよい。

【窪田】【鶴見】

網羅的に、うまくまとめている。

(2) コミュニケーション

【宮口】

先生が言ったことを覚えられない子どもが増えているが、社会に出ると、耳から入る情報が増える。コミュニケーション力、コグトレで重視している「聞く、見る、覚える」という認知能力が必要となる。

人間力や生きる力の前提は、コミュニケーション力があること。非認知能力と認知能力が相互に必要なことを書いた方がよい。

【窪田】

コミュニケーション力を直接育てる学校での「子どもつながりプログラム」の実施と、実践で活かせる場が重要。

(3) 地域・企業との連携

【上田】

プラン案には、教育委員会と学校をサポートする存在として、企業や地域のことがしっかり書かれている。安全・安心を提供できるのは地域であるということを、より鮮明に出した方がよい。

企業は、子どもに成功体験を与える存在であり、それをできるのが北九州市の強みである。

【宮口】

教員免許がない人の活用など、産学官民の連携が重要。地域とのつながりがキーワードであり、企業・人的ソースを生かすモデルになりうる。

【窪田】

企業が行うことも支援の組織化を。プラン案の2ページには、居場所作りの主要施策にハード面だけが挙がっているが、学校と家庭以外の居場所となるサードプレイスにも触れてほしい。

相談できないことは、人と会うことで改善される。プラン案にも書かれてはいるが、マンパワーが重要であり、学校にコーディネート専門人材を。

【鶴見】

学校にクローズせず、地域まるごとで教育の場となればよい。

【泉】

地域や企業との連携の中で、こどもが第三者の大人と出会える機会をつくると、STEAM教育、言語化・実践の継続的なトレーニングが重要。

【眞鍋】

学校と関わることで、地域・企業も学ぶことができる。

(4)その他

【友納】

他都市では宿題を廃止、または減らした例もあるので、宿題の出し方を柔軟にしてほしい。一律に宿題を課すことで、家庭環境によっては親子の葛藤が高まるケースがある。

「誰ひとり取り残さない」個に合わせた支援を、できるだけ進めてほしい。あわせて、教職員の働き方改革も。

【泉】

教職員のアンケートで挙がっていた、職員同士のコミュニケーションを進める必要がある。校務DXの推進が、新たな風土づくりにつながるとよい。